

重度感覚障害により体性感覚フィードバックが得られにくい症例に対する視覚的イメージを用いた介入

○横山 航太¹⁾ 高見 宏祥¹⁾

1) 新札幌パウロ病院

【はじめに】

Synofzikら（2008）は視覚や体性感覚フィードバック（以下、FB）の同期が時空間的に一致することで身体所有感が生じると述べているが重度感覚障害によりFBが得られにくい場合には身体所有感の再獲得に難渋する場面を多く経験する。今回、重度感覚障害を呈した症例に対して視覚的イメージによる感覚情報の予測を行い、身体所有感に改善が得られたため報告する。

【症例紹介】

70歳代後半の女性で右利き。右視床出血にて視床後外側に限局した低吸収域。Br-stage(以下、Brs) : 上肢IV-手指IV, Fugl-Meyer Assessment (以下、FMA) 上肢:35/66, トレムナー反射・ホフマン反射:陰性, 表在・深部覚共に肩のみ僅かに認識可能, 肘から遠位は重度鈍麻～脱失, HDS-R:30点, FIM運動項目:27/91点で左上肢の参加はなく, 左手には呼び名を付けていた。左上肢の運動は異常な放散反応や過剰な運動単位の動員がみられ, 特に到達機能のエラーが観察された。

【倫理的配慮（説明と同意）】

報告に際し本人及び家族に書面にて同意を得ている。

【病態解釈】

皮質脊髄路の損傷は少なく、随意性は比較的保たれているが、感覚障害により運動に伴うFB情報と予測される感覚情報の比較が困難となり、特異的病理が出現したと考える。さらに、左手に呼び名を付けたり、左上肢の不使用は身体所有感の低下によるものと考えられる。

【介入】

肩の運動方向の認識は困難だったが視覚的イメージの想起は可能だったため放射状に引いた線軌道を矢状面上に設置し、肩関節の角度により上肢が様々な方向へ動くことを視覚的に確認し、視覚的イメージを想起させその際に肩に生じる感覚情報を予測させた。その後閉眼で他動運動にてなぞり、予測した感覚と比較させる課題を実施した。課題は難易度を段階付けながら週5回7週間実施した。

【結果】

Brs:上肢IV-手指V, FMA上肢:40/66, FIM運動項目:42/91点。左手に呼び名を付ける様子はなくなり、更衣時に左手で衣服やボタンを操作、タオルを両手で絞るなど左上肢の使用機会が増加した。

【考察】

FBが得られにくい症例に対しては視覚的イメージによる感覚情報の予測を行うことで実際に得られる感覚FBに注意が向きやすくなり、身体所有感の向上に効果があることが示唆された。